

## 第14回Long Ashton国際シンポジウムに参加して

飯嶋盛雄（名古屋大学農学部）

連合王国（通称イギリス）の首都ロンドンから西へ約150Km、中世に貿易港として栄えたブリストルの地にあるBristol大学Long Ashton研究所にて、1995年9月13日より15日まで3日間にわたって、第14回Long Ashton 国際シンポジウムが開催された。Long Ashton 国際シンポジウムは1967年の第1回以来、生物学とその関連分野における話題を取り上げてきており、今回の第14回シンポジウムでは、「植物の根-細胞レベルから根系まで」というテーマで、根の研究に関する最近の話題を取り上げた。本シンポジウムには、連合王国(60名)をはじめ、アメリカ合衆国(11名)、ドイツ連邦共和国(8名)、オランダ王国(7名)、ロシア共和国(7名)など27ヶ国から総勢150名が参加し、日本からも根研究会事務局の森田・阿部氏以下7名の参加者があり、21題の招待講演と89題のポスター発表が行われた。

招待講演は根の発達と形態、構造と機能、環境との相互作用、微生物との分子レベルでの相互作用、の4つの部門に分かれ、植物の根を対象とし研究を進めている著名な研究者の最近の研究成果あるいは研究上の哲学を生で拝聴できた。ただし、Native Speakerの講演では、ちゃんと起きており（昼寝せずに）しっかり理解しようとしたのにもかかわらず、ひいき目にみても半分も理解できないものもあり、自分のヒアリング能力の弱さを痛感した。とくに質疑応答では、何人もの発言が錯綜し会場全体が議論伯仲の中にあっても、何のことやらわからないこともあり、隣りに座った人に聴いてやっと納得したことも多々あった。講演全般をとおして、最近の遺伝子レベルの研究で頻りに用いられるアラビドプシスを材料とし、その形態形成や機能を論じたものが全体の1/3近くを占めており、従来の研究でよくみられたトウモロコシやエンドウなどの作物種を扱ったものとはほぼ同等の比重を占めてきたような印象を受けた。個人的な興味からは、カリフォルニア大学のRost 教授らの講演で、根冠の構造に関して根冠細胞の配列が螺旋型を呈する種が双子葉植物種にいくつみられるという発表があり印象に残った。講演後、個人的に尋ねると、これはおそらく新しい知見であり現在投稿中とのことであった。また、カールトン大学のMcCully 教授の講演では、最近の分子・生化学的手法による根の細胞や遺伝子レベルでの研究から根系全体の養水分吸収機能に関する研究までを通じて、それらは一本の根あるいは根系全体の構造を理解した上で成立するというコメントがあり、圃場から引き抜いたトウモロコシ根系のカラーズライドを用いて、根系は様々な根から構成されていることを強調されていた。全く同感である。

なお、コーヒーブレイクの間にMcCully 教授に、根冠μシゲルの生態的役割についての疑問点を伺ったところ、これからそのことに関連した論文をいくつか投稿するからその別刷りを送ってあげるとのことで、今後も連絡を取り合うこととなり、非常に有益であった。その他何人かの研究者とも交流することができ、ちゃっかり将来の留学の打診をすることもでき、個人的にはますます満足のいくシンポジウム参加であった。



シンポジウム会場前の芝生広場（晴れの日はこちらで昼食）での参加者の全体写真